

オーヒンレック写本と十字軍

酒見 紀成*

(平成25年8月1日受付)

The Auchinleck Manuscript and the Crusades

Kisei SAKEMI

(Received August. 1, 2013)

Abstract

My impression of the forty-four works included in the Auchinleck manuscript is that the medieval period was the period of the Crusades in the literal sense of the word. So I searched the manuscript for the keyword “Saracen,” spelled *Sar(r)asin*, *Sar(r)azin*, or *Sar(r)azin*, and found it in fourteen works. This figure is significant because in this manuscript seventeen items out of forty-four are religious texts. Next, in each item I inspected the context in which the Crusades are referred to. Finally, Turville-Petre’s opinion, expressed in his *England the Nation: Language, Literature, and National identity 1290–1340* (1996), that this manuscript was ordered by the Beauchamp family is presented in a favorable light.

Key Words: Auchinleck manuscript, the Crusades

0. オーヒンレック写本 (National Library of Scotland, Advocates’ MS 19.2.1) 所収の40余の作品を読んでいると、中世とは十字軍の時代だったのだなと改めて思う。本稿ではこれらの作品を十字軍運動とのかかわりという観点から論じてみたい。

1. 時代背景

この有名な写本はロンドンで1330–40年頃製作されたとされている¹。この時期は‘Edwardian period’ (1270–1370) に当たる。いったいどういう時代だったのだろうか。

Edward 1世 (1239–1307) は、父王 Henry 3世が死去した時、第8回十字軍に遠征中であつたが、諸侯によって国王に推戴された²。彼は「好戦的で、征服欲の旺盛な王」³であり、1277年、ウェールズを攻めてこれを征服し、1290年にはスコットランドの王位継承に介入したが、これはうまくいかなかった。さらに1294年にはガスコーニュ地方をめぐるフランスとの戦争を開始した。

Edward 2世 (1284–1327) は「王としての力量も品位

も持ち合わせず」⁴、寵臣たちが政治を左右した。1314年にはスコットランドに兵を送つたが、大敗した。1326年、王は息子のエドワードを擁した王妃のイザベラ (フランス王の娘) とその愛人マーチ伯ロジャー・モーティマー等の軍勢によって捕えられ、廃位させられた。オーヒンレック写本の item 44 *The Simonie* 「聖職売買」は別名を *On the Evil Times of Edward II* と言ひ、聖職者と当時の社会状況を痛烈に批判している。

Edward 3世 (1312–77) は15歳で即位したため、最初は母のイザベラとロジャーが政治を壟断した。18歳なった頃、母を終身幽閉処分に、ロジャーを死刑にして実権を握つた。1333年、スコットランドを制圧。内政においてもすぐれた政治手腕を発揮し、治世の前半は順調だった。1337年、フランスとの百年戦争が始まるが、1360年の和議においては、フランス王位継承権を放棄する代わりに、ガスコーニュ、アキテーヌ、カレー、ポンティウ、ギーヌなどの広大な領土を獲得した。しかし、晩年は不遇だった。1369年には王妃フィリッパを失ひ、エドワード黒太子も

* 広島工業大学工学部電子情報工学科

病に倒れて1376年に死亡。1375年の和議では、前回フランスから奪い取った領土の大半を失った。

この時代には戦争の他に、ペスト（黒死病）の大流行もあった。ペストは14世紀末までに3回の大流行を繰り返して、猛威を振るった。そしてヨーロッパの人口の三分の一が死亡したと言われる。

2. 十字軍とは

十字軍はイスラム教の勢力の拡大を阻止するために始まったものである。モハメッドが632年に亡くなって間もなく、後継者のカリフたちはアラブ部族のエネルギーを征服活動へ振り向け、東ローマ帝国を破ってシリア、パレスティナ、エジプト、北アフリカを奪い、ついに651年にはササン朝ペルシャを滅ぼし、領土を拡張した。そしてそこにイスラム帝国が建設され、8世紀にアッバース朝ができる頃には、イスラム世界はアフガニスタン、イラン、イラク、シリア、エジプト、北アフリカを経てスペインにまで広がった⁵。

中世のロマンスに頻繁に登場するサラセン人とは、北アフリカを制圧したアラブ人と、彼らに征服されてイスラム教徒になったベルベル人とムーア人を指すが、この人々は農耕には縁が薄かったようで、彼らがビジネスとしたのは海賊行為であった。破壊と略奪と人攫いであるが、それは彼らにとって聖戦（ジハード）であった。652年には最初海賊がシチリア島のシラクサに襲撃し、キリスト教世界はサラセン人の海賊に一千年以上も悩まされることになる。被害に遭ったのはシチリア、サルデーニャ、コルシカ、中部イタリア、プーリア地方、トスカナ地方、南仏のサントロベなど、地中海に面した地方に住む人々であった。

ギリシア正教会の長でもあったビザンチン帝国（東ローマ帝国）の皇帝アレクシオスは、11世紀末、イスラムの勢力に小アジアまで肉薄され、ローマ法王に援軍の派遣を要請した。それを受けて1095年、ウルバン2世はフランスのクレルモンで教会会議を招集し、十字軍宣言を行った。東方のキリスト教国の苦難と異教徒に対する聖戦が必要である、十字軍に参加した者は罪が赦される、と⁶。

第1回十字軍は出発して3年後の1099年、ようやくエルサレムの征服に成功し、エルサレム王国のほか、エデッサ伯領、アンティオキア公領、トリポリ伯領などの十字軍国家がつくられた。しかし、50年も経たないうちにエデッサ伯領は奪い返され、エルサレムも1189年にサラディンによって奪回された。その時の十字軍は第3回十字軍で、イングランドの獅子心王Richard 1世(1157-99)も参加し、1191年にアッコンの奪還には成功したが、エルサレムの奪還は失敗に終わった。前ページで触れたように、Edward 1世が参加したのは第8回十字軍(1270-72)で、この時

もアッコンの再奪還に失敗し、以後、中近東の十字軍国家はすべて消滅する。

中世の人々は信心深かった。中世末期にイングランドへ印刷術をもたらしたウィリアム・キヤクストン(c.1422-91)は100冊余の本を印刷・出版しているが、その中に第1回十字軍とそれに続くエルサレム王国の建設を扱った本がある(*Godeffroy of Boloyne, or, the Siege and Conqueste of Jerusalem*)。それを彼は自ら英訳しており、エルサレムを奪還するため、本気で新たな十字軍派遣の機運を高めようとしたのである。

3. リチャード1世とシャルルマーニュ

この二人の王は十字軍そのもの、十字軍の主役だと言ってもよい。

Item 43 *King Richard*

この作品は前述のように第3回十字軍の話であり、最初からイングランド王リチャードとフランス王フィリップの不仲が描かれる。シチリア島のメッシーナではフランス人とギリシア人によって部下が殺される。また、その頃、船で運んでいた財宝がギリシア人の皇帝に略奪されるという事件が起こる。リチャードはそれを取り返すべくギリシア人と戦い、ついに皇帝を跪かせる。それから大型帆船でアッコンへ向かい、包囲戦に加わる。そこで7年間も苦しんできたキリスト教徒の王や兵たちは大喜びする。ピサの大司教は7年間の敗戦や苦勞を語る。そしてリチャードの活躍でアッコンは陥落し、彼は征服王と見なされる。その時の作戦は、船で運んできた蜜蜂を巣箱ごと投石機で市内に投げ込むという奇抜なものであった。ちなみに、リチャード1世の母エレーノール・ダキテーヌも、フランス王妃であった頃、夫のルイ7世と共に1147年の第2回十字軍に参加している。

Item 40 *The Short English Metrical Chronicle*

アルビオンというイングランドの古名の由来から始まり、紀元前1200年にBrutがトロイからやって来た時からエドワード3世まで、50人の王について聖職者らしい関心を持って書かれている。一番手厳しいのはジョン王(在位1199-1216)に対してで、王はある修道士に毒殺されたと言う。リチャード1世のことは第2038～2188行にかけて書かれており、ここでも例の蜜蜂作戦のことが詳しく描かれている⁷。

Item 31 *Rouland and Vernagu*

前半はシャルルマーニュ王のスペイン遠征の話。遠征のきっかけは、スペインの異教徒の王がエルサレムの司教を追放したため、ビザンチンの皇帝は悲しみ、スペイン王を

取り除いて欲しいと神に祈る。すると天使が降りて来て、シャルル王（在位 768-814）を頼りなさいと言う。目的がエルサレムの奪還でこそないが、スペインの町々をイスラム勢力から解放したという点で、十字軍とまさに同じ構図である。フランク王国のシャルル王は 800 年 12 月にローマ法王レオ 3 世から神聖ローマ皇帝の冠を授けられており、如何に法王から頼りにされていたかが分かる。

4. 「サラセン」という言葉

中期英語のつづりは Sar(r)asin, Sar(r)azin, Sar(r)azin など幾つかあるが、「異教徒」を表すので、十字軍の影響がある作品にはこの言葉が出てくる筈である。オーヒンレック写本所収の 44 の作品について調べところ、14 の作品に現れる。44 作品のうち 17 が宗教的なテキストであることを考えると、この数字は決して小さくない。内訳は次の通りである⁸

Item 25	アーサーとマーリン	89
Item 32	オテュエル	48
Item 22	ウォリックのガイ (Couplet)	46
Item 25	ハンプトンのビーヴェス卿	24
Item 43	獅子心王リチャード	20
Item 2	タルソの王	12
Item 31	ローランとヴェルナギユ	11
Item 7	聖女カタリナ	7
Item 24	ガイの息子レインブルー	6
Item 40	韻文による短い英国年代記	6
Item 23	ウォリックのガイ (Stanza)	4
Item 4	聖女マルガレタ	2
Item 14	七つの大罪について	1
Item 19	フロリスとブランチフルール	1

前節で取り上げた 3 つの作品も確かに入っている。「ローランとヴェルナギユ」の後半では、シャルル王の前にヴェルナギユというサラセン人の大男が現れ、キリスト教の騎士たちを次々に捕える。ついにシャルル王の従兄弟のローランが立ち上がり、その大男と闘うが、なかなか決着がつかない。闘いが一段落した時、ヴェルナギユがローランにキリスト教の教理について尋ね、ローランは丁寧に教えてやる。それから互いの宗教をかけた闘いが再開される。そしてついにローランが勝利する。最後のスタンザは *Otuel* へのリンクとなっている。

Item 32 *Otuel a Knigt*

これは「ローランとヴェルナギユ」の続編である⁹。サラセン人の勇猛な騎士オテュエルがガルシア王の使者として

シャルル王の宮廷に現れる。彼はローランに殺されたヴェルナギユの甥であった。ガルシア王に臣従せよとの要求は断られ、ローランとの一騎打ちが始まる。オテュエルがあまり強いので、ローランは王の娘のベリセントと結婚するよう提案する。そして戦いの最中に、神の御力により一羽の鳩がオテュエルの頭に舞い降り、彼は闘う気をなくす。そしてキリスト教に改宗し、シャルル王の家臣となる。

ここで注意しなければいけないのは、「サラセン人」という言葉が本来の「イスラム教徒」を意味せず、単に「異教徒」の意味で使われる場合である。この言葉が一番多く現れる「アーサーとマーリン」もそうである。ここではデンマーク王の軍勢や、グイネヴィアの父親を攻めていたアイルランド王の軍勢が「サラセン人」と呼ばれている。中世が十字軍の時代であったからこそ、異教徒＝サラセン人という図式ができたのであろうが、アラブ人やムーア人にとってはいい迷惑であろう¹⁰。

5. 十字軍遠征という巡礼行

「サラセン」という言葉が「オテュエル」の次に多いのが、「ウォリックのガイ」と「ハンプトンのビーヴェス卿」である。両方とも舞台は海外である。中世のキリスト教徒たちは日々の生活の中で犯してしまった罪の数々を償うためにエルサレムへ巡礼に出向いた。そのとき彼らは上部が十字の形をした杖を携えていたが、それが武器に代わったのが十字軍である。ガイも第二部では自身が巡礼になっている。

Item 22 *Guy of Warwick* (Couplet)

恋人のフェリスに騎士として名を上げてから来なさいと言われたガイは、まずルーアンで開催された武芸競技大会で勝利し、次にアルマーニュ（ドイツ）へ行き、そこでも馬上槍試合に参加して名声を勝ち得、さらに「異教徒の سلطانに包囲されているギリシアの皇帝を助けるため」、ビザンチン帝国の首都コンスタンティノーブルへ向かう。そこでトルコの族長たちを撃退したため、皇帝から次の皇帝にしようと言われるが、信頼していた執事に裏切られる。そしてその執事に報復した後、皇帝の慰留を断り、帰国する。アゼルスタン王は暖かく彼を迎える。

Item 23 *Continuation of Guy of Warwick* (Stanza)

続編はガイのフェリスとの結婚後の出来事を扱う。ガイはこれまで何人の人間を殺しただろうと反省し、罪の意識から巡礼になる。アンティオキアの宮廷へ向かう途中、サラセン人たちに子供を全員捕えられたという伯爵に出会う。そしてまたある巨人との決闘に巻き込まれる。が、キリスト教の神の助けで何とか勝利する。それから、ギリシア、コンスタンティノーブル、アルマーニュへと巡礼の旅を続け、そこで落魄れた義兄弟のティリーと出会う。そし

てティリーの敵であるベラル公爵（ガイが殺したオットー公爵の甥）を倒して彼を元の地位につけてやる。帰国すると、妻のフェリスがガイの帰りを待ちながら健気に家を守っている。ある時、貧者の列に並んで彼女から食事を与えられるが、彼女はその巡礼があまり痩せていたので、ガイだとは分からない。それからガイは森に入り、以前知り合った隠者が住んでいた庵へ行く。隠者は亡くなっていたが、ガイはそこで隠遁生活を送る。ある夜、天使が現れ「十八日目の朝までに神はそなたを悲しみから解放し、この世から旅立たせて下さるでしょう」と言う。ガイはフェリスからもらっていた指輪を小姓に持たせ、彼女に届けさせる。フェリスは指輪を見、夫の死が近いことを聞くと、すぐさま出かける準備をする。彼女が隠者の庵に着き、ガイ卿を見、彼がフェリスを見た時、ガイの魂が体から出て行く。それから15日後にフェリスもそこで亡くなり、夫の傍に埋葬される。

Item 25 *Sir Beues of Hamtoun*

ガイの物語は「一般的なロマンスの材料を組み合わせたフィクション」¹¹であるが、前半部のガイはリチャード1世を思い出させる。「ハンプトンのビーヴェス卿」もガイの物語にそっくりである。ビーヴェス卿の父親もガイと言う。ガイ卿は高齢で結婚したこともあり、奥方はアルマーニュ王に夫の殺害を頼み、そして息子のビーヴェスを奴隸として異教徒の商人に売る。商人はビーヴェスをサラセン人のアルメニア王に進呈する。アルメニア王に仕えることになった彼は、やがて王女のジョシアンから求愛される。が、ビーヴェスが獐犷な猪を仕留めたことに嫉妬した王の執事とその一派に襲われたり、助けてやったダマスカス王の家来の讒言により、ビーヴェスが娘を陵辱したと思込んだアルメニア王の工作により、七年間も地下牢に投獄されたりする。何とか脱獄してみると、ジョシアンはモンブランの王に嫁がされたという。ビーヴェスは巡礼と服を交換してジョシアンに会いに行く。ジョシアンはビーヴェスへの愛のため、毎日、食べ物や服を施していると言う。ビーヴェスは会いに行く。彼の眉がちぎれていたため、最初はビーヴェスだと分からなかったが、彼が荒馬のアルンデルに飛び乗った時、ビーヴェスだと分かる。巡礼姿の彼はジョシアンを連れて逃げる。モンブランの王はアスコバルドという大男に追わせる。ビーヴェスは彼と闘い、彼を殺そうとするが、ジョシアンの提案を容れて家来にする。そして叔父であり家庭教師でもあったサベールのいるワイト島へ行く。それを聞いたビーヴェスの母は、父親のスコットランド王にビーヴェスたちを殺すよう依頼する。戦闘の結果、ビーヴェスたちが勝利し、スコットランド王も義父のドイツ皇帝も死に、ビーヴェスの母は絶望のあまり塔から落ち

て死ぬ。ビーヴェスはハンブシャーの盟主となり、ロンドンのエドガー王に挨拶に行く。ところが、王の愚かな息子がビーヴェスの馬が気に入り、アルンデルに近づいて後ろ足で蹴られて死亡する。ビーヴェスは馬を守るため、領地をサベールに譲り、自分が追放される方を選ぶ。そしてジョシアンとテリー（サベールの息子）と共にアルメニアまで来た時、森の中でジョシアンが産気づき、双子の男児を産む。ビーヴェスとテリーが戻ってみると、ジョシアンは裏切ったアスコバルトに連れ去られ、双子の男児だけが残されていた。ビーヴェスは一人をガイと名づけ、出会った森林官に預け、洗礼を受けさせるよう頼む。そしてもう一人はミルズと命名し、出会った漁師に預ける。ある夜、サベールはビーヴェスが傷を負った夢を見、さっそく十二名の騎士を連れて救援に向かう。そしてアスコバルドを殺してジョシアンを助ける。が、ビーヴェスたちと再会したのは7年後であった。それから子供たちとも再会し、皆でアルメニアへ赴く。エルミン王は他界する前に孫のガイ卿を呼び、王国のすべてを与える。そしてビーヴェスとガイはアルメニアの国民をキリスト教徒にする¹²。

6. 女人の十字軍

次の3つの作品はTurville-Petreが「女人の十字軍」と呼んだものである。

Item 2 *The King of Tars*

異教徒のダマスカスのスルタンが力づくでキリスト教徒であるタルス王の娘と結婚する。そして彼女に改宗を強要する。が、二人の間に生まれた子は手も足もない肉の塊だった。スルタンはお前が余の神々を完全には信じていなかったからだとなる。「では、この子を貴方の神々の前に持って行って生き返らせてください」と言う。スルタンがいくら祈ってもその肉塊は石のようにじっとしていた。そこで今度は私の神を試させてくださいと言い、牢獄に入れられていたキリスト教の司祭を出してもらう。そして司祭が聖水を作り、その肉の塊にヨハネという名をつけて洗礼を施すと、その子は大きな声で泣き、美しい赤子になった。しかし、物語はここでは終らない。タルソ王の娘は言う。「ですが、この子はまだ半分しか貴方のものではありません。貴方が洗礼をお受けにならなければ、この子も私も決して貴方のものにはならないのです」。スルタンは改宗する。しかし「もし余が我々の信仰を捨てたと分かれば、そなたは火刑に処され、余も八つ裂きにされよう」と言う。そこでタルソ王の娘は、私の父にすべての兵を率いて来るよう頼んで下さい、そして貴方はすべての領民をキリスト教に改宗するようお命じになり、それに従わない者は死刑になさってください、と言う。実際、かなりの数の者が命命に従わなかったため、打首にされたのである。

Item 5 Seynt Katerine

かつてギリシアにマクセンティウスという皇帝がいた。彼は異教の神を信じる有力なサラセン人で、ある時、すべての国民にマフーン神に詣でるため、供え物を持ってアレクサンドリアへ来るよう命じた。その国にはもう一人、コストスという名の王がいて、彼には15歳になるカテリナという娘がいた。彼女は熱心なキリスト教徒だったので、皇帝の御前へ行き、陛下がなさっていることは間違いですと言う。それで皇帝はその国で一番の賢者たちに、その娘と論争して打ち負かすよう命じる。偉大な学者たち50名が集められ、彼女を論破しようとする。が、カテリナは天使に助けられて穏やかに反論し、逆に学者たちを説き伏せてしまう。困った皇帝は外国の賢者に相談に行く。皇帝が留守の間、王妃が獄中のカテリナに会いに行き、天使たちが娘の傷の手当てをしているのを見てキリスト教に入信する。帰国した皇帝は特別な刑車を作らせる。が、主の御力によりその刑車が暴走して四千人のサラセン人が命を失う。このことで王妃は皇帝を責め、イエス・キリストに貴方の罪を赦してもらいなさいと言って、激怒した皇帝に殺される。そしてカテリナは言う、「私は今日、喜んであなたのために死にます。あなたが思いつくどんな拷問にも耐えてみせましょう」と。この物語は『黄金伝説』にあるものとほぼ同じである¹³。

Item 4 Seynt Mergrete

アンティオキアの祭司長にマルガレタという娘がいた。彼女は乳母の影響でキリスト教に入信する。そして領主に見初められ、執拗に棄教を迫られる。拷問を受けた時、「各人の味わう苦しみはすべて魂の食べ物なのです」と言って殉教する。『黄金伝説』の「聖女マルガリタ」は男の姿に変装して修道士になった美しい乙女の話であり、オーヒンレックのそれとは全く異なる¹⁴。

7. 結論、或いはオーヒンレック写本の注文主

「サラセン」という言葉のリストにあってまだ論じていない作品が3つある。

Item 24 Reinbroun, Gij sone of Warwicke

これはオーヒンレック写本でのみ伝存する。ガイの物語の続きに対する民衆の要望に応えたものと言われる¹⁵。続編では巡礼になったガイを捜しに外国へ出かけていたヘラウドがガイの息子の教育係として登場する。レインブルーンが7歳になった時、外国の商人たちに拉致され、アフリカの王への贈り物とされる。そして王の許で遅く成長し、騎士となる。一方、ヘラウドは彼を捜しに船に乗り、ついにアフリカに上陸する。が、サラセン人たちに捕えられ、首長の所へ連れて行かれる。そして二人はそれぞれ王と首

長の代わりわりに決闘をするが、相手が誰かは知らない。

Item 19 Floris and Blanchefleur

起源はビザンチンのロマンスと言われる¹⁶。フロリスは異教徒のスペインの王子で、ブランチフルールはあるフランス人のキリスト教徒の騎士の孫娘。騎士は聖ヤコブの祠に詣でる途上で異教徒の兵たちに殺され、その娘はスペインの王妃に与えられる。そして二人は同じ日に出産する。ブランチフルールとフロリスである。二人は一緒に育てられ、とても愛し合うようになる。国王は二人を引き離そうとしてフロリスを外国の親戚の公爵に預けるが、うまくゆかず、結局、ブランチフルールをバビロンの貿易商に売り飛ばし、彼女の墓を作る。商人は帰国後、彼女を首長に売る。そうとは知らずフロリスは自殺しようとする。両親は已むなく本当のことを話す。そしてフロリスは彼女を捜しに家令を連れて旅にでる。最後に二人は結ばれるのであるが、それを許したバビロンの首長の寛大さには驚かされる。

Item 14 On the Seuen Dedly Sinnes

七つの大罪、主の祈り、使徒信条、キリストの受難について英語で説明したもので、「サラセン」という言葉は終わり近くで、「戦さのある所に平和を送り給え。そして聖なる国へ行けるようキリスト教徒に恵みを与え給え。そしてとても猛々しいサラセン人たちを殺し、キリスト教徒たちを生かし給い、聖なる教会の平和を助け給え」と祈るところに一回だけ出て来る。

オーヒンレック写本にはロマンス、宗教的な作品、年代記、風刺詩、問答体の詩など44の作品が含まれている。ではいったい誰がこのような写本を作らせたのであろうか。この問いに対するヒントを与えてくれたのは第6節で引用したTurville-Petreである。彼は一万行を超える「ウォリックのガイ」が写本の中央に位置すること、また女人の十字軍など、女性や子供をも読者・聞き手として想定していることなどから、Beauchamp家ではないかと考えている。と言うのは、ボーシャン家はGuyを始祖とすると主張しており、1305年、当主のGuy de Beauchampは十字軍関連の本をBordesley Abbeyに寄付している。さらに、この写本に入っているList of Norman Barons' Names (item 21)は征服王Williamに従ってイングランドへやって来た騎士たちで、Beauchampという名も確かにそのリストに載っているからである¹⁷。

注

本稿は、第76回チョーサー研究会（2011年7月2日、於駒澤大学）で行った口頭発表を十字軍という観点から整

理し直したものである。

1. Laura H. Loomis, 'The Auchinleck Manuscript and a Possible London Bookshop of 1330-1340', *PMLA*, 57 (1942) 以来これが定説となっている。
2. Wikipedia の「エドワード1世 (イングランド王)」の記述に拠る。
3. 松浪有・御輿員三『講座 英米文学史 第1巻 詩I』(大修館 1977), 135-137.
4. 松浪有・御輿員三, 前掲書, p. 136.
5. 塩野七生著『ローマ亡き後の地中海世界 上』(新潮社 2008) とライト裕子さんのブログ「モハメッドの生涯」に基づく。
6. 塩野七生著『十字軍物語1』(新潮社 2010), 22-28.
7. オーヒンレック写本の解説としては Thorlac Turville-Petre, 'Englishness in the Auchinleck Manuscript (Advocates 19.2.1)', in *England the Nation: Language, Literature, and National Identity 1290-1340* (Clarendon Press, 1996), 108-141 が秀逸である。それによれば, この年代記はもともと 900 行であった。だとすると, この写本に含めるにあたって 1466 行が書き加えられたことになる。
8. オーヒンレック写本はスコットランド国立図書館にあり, ウェブですべてのテキストを読むことができる (<http://auchinleck.nls.uk/>)。そのうち 40 の作品には筆者の拙訳がある (<http://www.ec.it-hiroshima.ac.jp/sakemi/>)。
9. ローランの弟 Oliuer は 'pe louerd sein Richer' (l. 854) にかけて, 投降した敵将クラレルを釈放しようと言う。もしこれが George Ellis の言うようにリチャード1世だとしたら, 翻訳者が持ち込んだものであろう。それとも, 13世紀に作られたフランス語の *Otinell* において既に 'canonise' (J. O. Halliwell) されていたのであろうか。
10. Turville-Petre によれば, 「アーサーとマーリン」のサラセン人はすべてフランス語の原典 *Merlin* では *li Sesnes* (サクソン人)であった。オーヒンレック写本にある「ホーン王子とリムニルド姫」(item 41)では, ホーンが戦う相手はデーン人であるが, 南部版の *King Horn* ではサラセン人に変えられている。
11. John Edwin Wells, *A Manual of the Writings in Middle English 1050-1400* (The Connecticut Academy of Arts and Science, 1916), 17-19. しかし, もともとガイの三部作は, 材源であるアングロ・ノルマン語の *Gui de Warewic* では約 13,000 行の1つの作品であった。そして *Guy* の続編と同じ語句や詩行が *Reinbroun* や *Amis and Amiloun* (item 11) にも現れることなどから, Loomis (1942) は, オーヒンレック写本製作には editor が存在したとする説を発表し, Turville-Petre (1996) もそれを支持している。
12. フランス語のソースにも他の英語版にも, 彼らがアルメニアをキリスト教国にしたとは述べられていない (Turville-Petre の前掲書を参照)。オーヒンレック版では 4620 行であるが, 興味深いことに, 最初の 486 行は 6 行の tail-rhyme スタンザ, その後は short couplet になっている。逆に, 「ウォリックのガイ」の第一部は couplet, 続編と第三部の *Reinbroun* は 12 行のスタンザで書かれている。
13. 前田啓作・山中知子訳, 『黄金伝説4』(平凡社, 2006)。『黄金伝説』とは, キリスト教会の歴史を飾る諸聖人の伝記の集大成であり, 作者は後にジェノアの大司教になったドミニコ会士ヤコブス・デ・ウォラギネ (? 1230-1298)。キャクストンも英訳しているが, あまり正確ではないようである。
14. オーヒンレックの *Seynt Mergrete* は, Turville-Petre によれば, Trinity College Cambridge MS. 323 にある聖女伝の改作である。
15. John Edwin Wells, op. cit., 17-19.
16. A. B. Taylor, ed., *Floris and Blancheflour* (Oxford, 1927), 1-25. しかし, 今ではフランスの詩人が 1160 年頃, 東洋的な要素を取り入れて作ったものという説が有力となっている (『中世英国ロマンス集 第三集』, p.95)。
17. John Lydgate (c.1370-c.1450) もウォリック伯 Richard Beauchamp (1382-1439) の長女 Margaret のために *Guy of Warwick* (1442) を書いている。Martha W. Driver, "In her owne persone semly and bewteus': Representing Women in Stories of Guy of Warwick", in *Guy of Warwick: Icon and Ancestor*, ed. by Alison Wiggins and Rosalind Field (Cambridge: Brewer, 2007), 133-134 を参照。